

寄稿

『論語に学ぶ』

川越 清司

最初から大きなテーマで赤面いたします。本年七十一歳になり、残りの人生において矩（のり）を踰（こ）えずに過ごせることを願っている今日この頃です。小さい時より祖父父母が何となく言われていた言葉を思い出されます。例えば過ぎたるは猶及ばざるが如しや、倦（う）むことなかれとか、何も意味が分からなくても年を重ねるとともに何となく漠然と解ってくるようになりました。

そんな時に藤樹先生生誕四百年祭事業の役員をさせていただき、論語と親しくなる機会を得ました。当時九十歳になられた伊與田覺論語普及会学監でした。かくしゃくとされて温かくて厳しさをおぼえる気風を持ち合わされておられました。月に一度学監の論語の講義を拝聴する機会が得られ、目から鱗が落ちる連続でした。その中の一つに『或（ある）ひと曰く、徳を以（もつ）て怨みに報いば何如

（いかん）。子曰わく何を以てか徳に報いん。直（なお）きを以て怨みに報い、徳を以て徳に報いん。』（憲問第14）の章句に出会いました。この言葉は、わたくしの今までの価値観を大きな舵を切る言葉でした。それはすべての人に、寛容の精神で応対するのが最善なことだと思つて生活をしてきました。そうすると中にはどうしても許せないことに出会つても心を大きく持つて応対するのですが、そうすると、どうしても歯切れが悪くどこか釈然としないことで終わつてしまうことが多々ありました。そんな私の性格が周りには、あの人はいい人だに写つたのかもかもしれません。そのようなときに前出の論語の章句に出会いました。それは“直（なお）きを以て怨みに報い”という言葉です。この言葉ですくわれた感がありました。それはよこしまな事は正直に対応せよとの教え、そんな簡単なこと何言っているのかと思われませんが、この章句に出会わなければズルズルとこのままで寿命を迎えると思うと冷汗がでるおもいです。論語には人それぞれに又時々この様な効果があると思われます。

この年では記憶力が悪くなか

な覚えることが出来ませんが、読書百遍自ずから意通ずると言われています。私はもう試験がありませんので気楽に素読を楽しんでいきます。素読とは声を出して読むことです。伊與田覺先生の言葉に古典を学ぶ上に於いて大切なことは「素読」です。素読は天命に通ずる先覚の書を、自分の目と口と耳とそして皮膚を同時に働かせて吸収するのです。これを読書百遍で繰り返し繰り返し繰り返すことによつて自ら自分の血となり肉となるのです。それが時あつて外に滲み出ると風韻となり、そういう人格を風格ともいふのです。おしゃつておられます。また明治大学教授齋藤孝先生も素読は意味を理解するというより、何度も音読して言葉を体に刻み込む学習法です。精神性の高い文章を素読によつて自分の内側にしつかり入れるとそれが力に代わるのです。その素読のテキストの筆頭は論語だとおっしゃつておられます。

近頃何となく知らず知らずのうち論語の章句が口に出てくるのは嬉しいやら恥ずかしいやら。論語読みの論語知らずとよく言つたもので、少しわかってくるのと恥ずかしくて人前で話

すのはできなくなります。會員の皆様には仮名論語をお勧めします。藤樹書院で取り扱つておられていますので、是非お問い合わせしてみてください。

最後まで駄文に付き合つていただいたことに感謝申し上げます。

高島藤樹会の益々のご発展を祈念し、又會員の皆様の幸運を願います。

